6月の行事予定
5日　環整協評議委員会　13日　7協総会
12日 6協実務者会議　20日　６協理事会・総会

組合の異動
5月初日組合員総数257社
31日　米一（廃業）
6月初日組合員総数256社予定

㈱うおいちの商品情報6月号をホームページに掲載しています。

【さかなの動き】 九州アジ 量まとまり相場安定松浦 ５月10万箱射程

（5月29日みなと新聞）

西日本大中型巻網（西巻）によるアジ漁が盛漁期入りした。４月は水揚量が例年よりも少なく単価は大幅に上昇。浜での選別処理能力の低下や、冷蔵庫の空き不足による制約で、水揚げが遅れた魚「トメ物」が目立った。５月は春のブリ漁が終わり、アジ狙いの船団が増え、量がまとまり始めた。主要水揚げ地の松浦魚市場（長崎県松浦市）のアジ類の４月水揚量は前年同月比２３％減の４万９０００箱（１箱１７キロ前後）。平均箱値は２・４倍の７９００円。単月別では２０２４年３月以降で最高値だった。５月水揚量については「累計１０万箱に届くかどうかというところ。水揚げは安定。相場は昨年５月よりも高く、箱４０００円前後で推移」と卸。５月はθ子（ゼンゴ、１尾９０グラム前後）、マメθ子（１尾８０グラム前後）といったサイズが中心で脂のりは良かった。一方、長崎魚市場（長崎市）では、鮮魚向けマアジ（１尾１５０グラム以上が中心）の４月水揚量が６７％減の２３０トン。平均キロ単価は９５％高の３７６円。５月は累計３００～４００トンの水揚げを見込む。５月第４週までの相場はキロ３００～２００円で推移した。

デイブレイクの冷凍寿司「Sushi Tech」で高評価得る

（5月9日水産経済新聞）

冷凍機の企画・開発や冷凍食品の流通事業を手掛けるデイブレイク（株）（東京・品川区、木下昌之社長）は、東京・江東区の東京ビッグサイトでこのほど開催された「ＳｕｓＨｉ　Ｔｅｃｈ　Ｔｏｋｙｏ　２０２５」に出展し、冷凍寿司をＰＲした。試食した来場者の９７・５％が「おいしい」と回答し、品質の高さが評価された。

（右欄上に続きます）

６月からの米国輸出を前に、確かな手応えを得た。同イベントでは、サーモンやタイのにぎりのほか、カリフォルニアロールの冷凍寿司を合計２１００カン、試食提供。同社の特種冷凍機「アートロックフリーザー」と独自レシピで、解凍後も鮮度と食感を保っている。同社のアンケート調査によると、６９・５％は「とてもおいしかった」、２８・０％は「おいしかった」と回答。「スーパーなどで販売されていたら購入したいか」という質問に対して、６１・０％は「日常的に購入したい」、２８・４％は「特別な日に購入したい」と購入意欲を示した。今年６月から米国の小売店の定番商品として販売することが決まっている。同イベントで得た評価を追い風に、海外展開をさらに加速させる。

4月の国内生鮮大物　豊洲市場　クロマグは天然・養殖とも上回る

（5月30日水産経済新聞）

（株）時事通信社が集計した東京・豊洲市場４月の生鮮大物売場、国内物の入荷本数は２４０７本で、前年同月比４０・８％増加した。マグロ（クロマグロ）の天然物と養殖物が増加したが、メバチとキハダは前年を下回った。マグロ全体の入荷本数は６７・３％増の２２２８本で、このうち、天然物は６９・３％増の２０２１本だった。主力は太平洋産のまき網物で、内訳は塩釜産が６８１本（前年同月６１本）、銚子産が５７本（５本）と、前年を大幅に上回った。まき網以外では、塩釜産はえ縄物を主体に気仙沼産や石巻産定置物なども含む宮城産が６３１本（４２２本）と豊富だった。一方、塩釜と並ぶ、はえ縄物産地の銚子産は１４４本（２０３本）に減少。

（次ページ左欄上に続きます）

はえ縄主体に釣りや定置物などの入荷があった房州勝浦産は１２６本（７４本）に増えた。この時期に、釣りやはえ縄物の水揚げがまとまる伊豆諸島漁場物は、下田（はえ縄主体）や沼津（釣り主体）などの静岡産が３４本（４２本）、神津島産が２５本（２４本）、三宅島産が１９本（なし）、三崎などの神奈川産が１６本（４３本）と低調だった。このほか、はえ縄物の那智勝浦産は６６本（８２本）と前年を下回った。定置網物は、ここ数年は入荷がほとんどなかった佐渡産が、４０キロ未満の小型主体に８０本とまとまったほか、岩手産が３４本（４０本）、福井産が２１本（４本）、舞鶴産が１５本（１２本）と各地から集荷された。佐渡産の入荷が４月にまとまったのは２０１１年（３５本）以来。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、まき網物の大型（１００キロ以上）がキロ２８５５円で前年同月比６・５％安、前年は入荷がなかった中型（１００キロ未満４０キロ以上）が２８００円だった。はえ縄、釣り、定置物込みの大型は４２６６円で２９・５％安。中型は３４８８円で１２・７％安。小型（４０キロ未満）は２２８４円と１２％安だった。４月は、まき網とはえ縄、定置物が同時入荷して、天然マグロだけで１００本を超える潤沢な日が続いたこともあり「セリ残品が増えて、下げ相場となる場面が多かった」（卸会社）という。伊豆諸島物の処分値は、２０００円を下回るケースもあった。月間の最高値は１８日に入荷した那智勝浦産のはえ縄物（２００・０キロ）で、１万１５００円だった。養殖マグロのセリ場売りは２０７本（前年同月１３８本）と５０％増加。産地別の内訳は、主力の長崎産が１６０本（７０本）、高知産が３３本（５２本）、大分産が９本（なし）、奄美産が３本（４本）、三重産が１本（５本）、鹿児島産が１本（５本）など。前年に５本あった愛媛産と、２本あった熊本産は途切れた。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は７０キロ上サイズが３５００～３３００円、５０キロ上サイズが３２００～３０００円、４０キロ下は２８００円前後。なお、時間外の相対売りでは、多い日だと一日に５０本前後が取引されているもよう。メバチ全体の入荷本数は９５本（１２８本）で２５・８％減少。主力の那智勝浦産は７４本（４７本）と順調に入荷したが、小笠原産は１４本（７１本）と大幅に減少した発表されたセリ値の平均は、２１４８円とほぼ前年並みだった。キハダ全体の入荷本数は８４本（２４９本）と６６・３％減少。下田水揚物を含む、八丈島や神津島などの伊豆諸島産が７４本（１７０本）と減少したことが主な要因。前年に１６本あった和歌山産は４本にとどまった。発表されたセリ値の全体の平均は、１２５０円と前年並みだった。

4月の輸入生鮮大物　豊洲市場　天然インドマグロ、クロマグロ減少（5月30日水産経済新聞）

（株）時事通信社が集計した東京・豊洲市場４月の生鮮大物売場、輸入物の入荷本数は４９９本で、前年同月（１３８６本）から６４・０％減少した。前年は潤沢だった天然インド（ミナミマグロ）が急減したほか、マグロ（クロマグロ）も減少。一方、メバチは３年連続で増加した。マグロ全体の本数は１６２本（前年同月２８２本）で４２・６％減少。前年に１１６本まとまった韓国産まき網物の入荷が途切れたことが主な要因。そのほか天然物では、主力のニュージーランド（ＮＺ）産は１２９本（前年同月１２８本）と前年並みを維持したが、地中海産の入荷はなかった（ギリシャ産３０本）。養殖物はメキシコ産が２９本（入荷なし）あった。マグロのＮＺ産は１２９本中、８７本が北島漁場で漁獲されたものだった。通常、この時期は南島漁場の魚が多いため、「魚群の移動が例年より早い可能性がある」（輸入業者）という。身質については「昨年の魚と比べ脂薄」（仲卸業者）との評価もあり、セリでも、高値がキロ７５００円（前年同月８５００円）、平均値が４０２９円（４１８６円）とやや下げた。ただし、はえ縄物で魚体の状態がよく、色持ちを重視する業者から一定の需要があったようで、

（右欄上に続きます）

（次ページ左欄上に続きます）

まき網物を中心とした国内マグロの入荷が急増した中にあっても健闘し、大きく下げる場面はなかった。養殖物のメキシコ産は全数不成立。相対販売で売りにくい２０キロを下回る小型が多く、実際のセリでも買い手が付くことはなかった。インドの天然物は１９２本（１０１４本）と前年比２割以下にまで急減。すべてＮＺ産で、豊漁だった前年と比べ、今年は漁期入りが大幅に遅れた影響で数がまとまらなかった。減少した中でも値動きは精彩を欠き、高値は５０００円（５３００円）、平均値は２８９６円（２７３８円）と前年比で大差なく、品薄を反映して高値がつり上がる場面はみられなかった。原因として、入荷が少量の日でも、取り扱いのある卸３社に均等に分荷され買いが分散したこと、さらには価格帯で競合する国内小型マグロや輸入メバチの増加などが挙げられる。メバチは全体で１４２本（前年同月８３本）と７１・１％増加。新型コロナウイルス禍前の２０１９年以来、６年ぶりに３ケタ台に回復した。内訳は主力の豪州産が９６本（８１本）と、前年入荷のなかったケープタウン産が４６本。豪州産は例年よりも１０キロ台の小ダルマサイズの入荷が目立った。通常このサイズは、米国向けか豪州国内で消費されるケースが多いが、今回は「日本での需要を見越して集荷した」（輸入業者）という。小型が増えた影響から、セリでは高値４２００円（前年同月４７００円）、平均値２５６０円（２９９３円）と下げたが、身質評価はおおむね良好で、国内メバチの入荷が少なかったこともあり、販売は好調だった。ケープタウン産は鮮度評価こそ高かったが、やや脂薄が目立ったほか、売れ行きが鈍化する月末近くに入荷が固まった影響もあり、買い手が付いた３４本の平均値は２５３２円と珍しく豪州産

〈総会〉東京魚市場買参協同組合 取引環境の向上図る

（5月30日水産経済新聞）

東京・豊洲市場の買参人でつくる東京魚市場買参協同組合（中川雅雄理事長）は２７日、場内の都講堂で第５２回通常総会を開き、

（右欄上に続きます）

２０２４年度事業報告や２５年度事業計画など全９議案を原案通り承認した。中川理事長は、「市場を取り巻く環境は年々変化し、そのスピードも速くなっている。流通形態の多様化に素早く対応しながら、組合員の取引環境の維持・向上に努めていきたい」と話した。２４年度は、後継者問題や長引く魚価の上昇などが影響し組合員が１２人減少。組合の加入者増を目指し、買参権取得に関する条件の緩和や申請書類の簡素化を実施した。２５年度は引き続き、協同購買に関する事業や、水産物情報の「ＢＡＩＳＡＮ通信」への掲載および組合員の要望をとらえたテーマの講習会など情報発信、団体協約の協定や事務代行に関する事業を行う。

6月の食品値上げが前年比３倍の１９３２品 帝国データバンク

（6月2日みなと新聞）

（株）帝国データバンクは５月３０日、主要食品メーカー１９５社が６月に値上げする予定の飲食料品が１９３２品目に上ると発表した。前年同月比約３倍で、６か月連続のプラス。原料米の価格上昇を理由とする値上げは、１００品目を超える東洋水産（株）はパックご飯「あったかごはん」の税抜きの希望小売価格を２１７円から２５３円にする。味の素（株）は「味の素ＫＫおかゆ」全６種などの出荷価格を約１０～１１％引き上げる原材料高に加え、物流費や人件費の上昇圧力も根強いことから、帝国データは今年１年間の値上げについて「２０２３年以来となる年間２万品目を超える可能性が高い」と指摘している。

【シラス干】 卸値上昇２０００円台前半 豊洲市場 大蛇行終息も漁回復せず

（6月2日みなと新聞）

東京・豊洲市場における５月のシラス干しの入荷は、３０日時点で先月から２割、前年からは３割減った。平均卸値はキロ２０００円台前半で先月から１００円程度上がった。

（次ページ左欄上に続きます）

５月初めに報じられた黒潮大蛇行の終息の可能性だが、影響の大きい東海・関東のシラス漁にはまだ恩恵を与えていない。中心産地は兵庫の他、５月最終週から船数の多さもあり、よく獲れている大阪。ここ数年は愛知、静岡、和歌山などの春漁が不調のため、６月が盛漁期の淡路島や瀬戸内海が浮かび上がる傾向にある。淡路島の西側は３日以降に漁が始まるため期待も高まる。高値は２５００円程度と高いものの、色・サイズなど品質は悪くなく、エビやハゼがわずかに混じる程度。スーパーのパック販売に「十分使えている」と卸筋は話す。　シラスは稚魚のため潮流に影響を受ける上、漁船もあまり沖には出ない。黒潮大蛇行の影響を受けづらい内湾が中心になっている現状だが、蛇行が中断しても東海や関東の復調につながっていない漁模様に卸筋も疑問を呈する。ただ、遠州灘は１０～１１月まで漁期が続くため、「期待はしている」と話した。

天気予報によるとしばらく好転が見込めず、「６月２週目まで厳しいのでは」と話している。価格帯がここ数年に比べて平均的に高いことで量販店・スーパーも販売に苦戦している。１・５キロの大きめの魚の半身を税別価格９８０円で売るのが難しい状態が続くことから、７００～８００グラムの１尾売りで１０００円未満に抑えようと工夫している。入荷の安定が見込めない中で、「特売で損するリスクも大きく、以前ほどイベント時の売場の選択肢にならなくなっている」ことに懸念を募らせている。日本産水産物の中国向け輸出の再開は技術的要件が厳しいため、生鮮水産物はかつての流通の形に戻るのは難しそうだ。しかし、輸出再開のアナウンス効果などで空輸の買い付けが集中する月曜日、木曜日の東アジアからの海外需要は今後増加していく可能性はある。（八田）

〈豊洲の旬〉キンメダイ
頻発するシケで相場高止まり　（6月4日水産経済新聞）

新店オープンなどを迎えた量販店・スーパーの売場の目玉として欠かせない商材になっているキンメダイは今年度、頻発する各地のシケで入荷が安定せず、相場は総じて高止まりしている。５月３週（５月１６～２２日）にようやく年度替わりしてから初めて中値で前年同期（キロ１８００円）を下回る１７００円まで下げたものの、長く続かず再び反発した。キンメダイの入荷量はシケに特に左右されやすい。静岡・下田などの沖キンメは凪（なぎ）が続いて大型船の入船が続けば一気に軟化するし、千葉や東京の離島の地キンメも漁が続けば相場はこなれる。しかし、入荷が切れれば急反発する。卸担当者によると、一日平均上場数量が３週ぶりに２ケタに乗った５月３週前後は「２週間近く入荷が増えて相場を下げた」。だがこの時期の入荷主力である東京の離島を筆頭に再び各地がシケモードへ移行。５月４週（５月２３～２９日）は再び前年割れに転じた。

（右欄上に続きます）

【さかなの動き】ノルウェーサバ　対日単価が最高更新
１～４月供給逼迫の中、需要堅調（6月3日みなと新聞）

ノルウェー水産物審議会（ＮＳＣ）によると１～４月の日本向け冷凍ラウンドサバの累計輸出高は前年同期比４２％減の９１１１トン、キロ平均輸出単価は２４％高の２８・５１ノルウェークローネ（約４０３円）と、過去最高値の更新が続く。ＮＳＣは「サバ供給の逼迫（ひっぱく）が予想される上、堅調な需要のため単価が上昇する。最重要市場の日本への直接輸出が低水準にとどまる。日本での加工は一部縮小し、ベトナムや中国など（日本より）人件費が低い国での加工が増えている」と説明する。日本の貿易統計によると、４月のノルウェーからの冷凍ラウンドサバ輸入高は１９・１％減の１３５９トン、４・１％減の７億６８６７万円。キロ平均単価は１９・８％高の５６６円だった。なお、北東大西洋サバの漁獲量について国際海洋開発理事会（ＩＣＥＳ）は

（次ページ左欄上に続きます）

２０２４年９月、２５年の勧告総枠を今期比２２％減の５７万６９５８トンと要求し、１０月の沿岸国会合で総枠に合意。ＮＳＣによると６月１２日からロンドンで沿岸国会議を開き、「合意を目指す」とノルウェー政府関係者。漁期は８月からで、ＮＳＣによると２４／２５年漁期の漁獲量は前漁期比２２％減の１６万５２９８トン。

【さかなの動き】道日本海ニシン 漁獲量伸びず45％減 ５月２０現在4年ぶり低水準3780㌧（6月4日みなと新聞）

北海道水産林務部の集計によると、今期の道日本海沿岸ニシン漁は後志、石狩、留萌、宗谷管内の５月２０日現在の累計漁獲量は前年同期比４５％減の３７８３トンとなっており、近年最多だった昨年を大きく下回る。石狩湾沿岸で１月下旬から漁期入り。４月上旬まで主産地の石狩湾漁協や小樽市漁協など石狩、後志管内を中心に漁が続いたものの、不振。その後、留萌管内の北るもい漁協、新星マリン漁協などに移り、４月中旬以降、漁獲を伸ばすものの前年の漁獲には及ばず、日本海一帯の漁獲量は半分程度にとどまった。管内別の漁獲量は、石狩１２５５トン（前年同期比５８％減）▽留萌１１０２トン（同３６％減）▽後志南部８６２トン（同５％増）▽後志北部５５０トン（同５８％減）。月別漁獲量は１月３２５トン（同４３％減）▽２月９４４トン（同６０％減）▽３月７３８トン（同５３％減）▽４月１５１９トン（同２４％減）。５月は２０日時点で２５６トン（同２５％減）。産卵群のピークは過ぎており、集計は５月末で終える。道日本海ニシンは豊漁だった昨年は例外としても、近年は５０００トン前後の安定した漁獲が続いてきたが、２０２１年並みの４年ぶりの低水準が確定している。

東京都の講堂（120人収容、プロジェクター付）
第一会議室（25人終了、モニターテレビ付き）
青果棟会議室（60人収容）3時間@5238円です。

（右欄上に続きます）

【さかなの動き】キタノホッケ 漁獲増え内販値下がり ロシア産 脂豊富で市場拡大期待（6月5日みなと新聞）

ロシア産シマホッケ（キタノホッケ）５４０～６４０グラムサイズ（冷凍ドレス）の内販キロ単価は今年、６４０円前後と昨年より５０～６０円安い。極東の漁獲可能量（ＴＡＣ）は昨年漁期の当初枠から約２倍の５万２８０トン。増枠が値下がりに つながっており、「為替も絡むが、昨年より安価が続く見通し。他産地と比べ脂のりなど品質面が強く、市場拡大を期待している」（商社筋）。従来、シマホッケ輸入は米アラスカ近海物（今年の漁獲枠１０万トン）主体だが、近年は魚体が小型化。ロシア産は大きく脂肪含有率が高い（平均約１５％）、寄生虫が少なく鮮度保持や内臓除去が丁寧であるなど、品質面に定評がある。　ロシア極東は今年、大幅に増枠した。一部船団が出漁していないため、実際の枠消化は「３万トンほどでは」（同）との予想だが、相場は下がりそうだ。取扱商社は「他の輸入魚と比べても安値で、脂も歩留まりも良い」と市場拡大に自信をのぞかせる。コンビニ惣菜など用途が広がる可能性も。日本向けのドレス物は７月下旬以降に生産が伸び得る状況で、この国内販売は「９月くらいからでは」（同）。　ロシアによると、来年の枠は２・３万トンと、従来水準に戻る可能性はある。

マグロ情報 ４月輸入 冷凍メバチ単価７５０円へ上昇 冷凍クロマグロF搬入増（6月6日水産経済新聞）

財務省の貿易統計によると、マグロ類４月の輸入実績は生鮮・冷蔵物が３５１トン（前年同月比１２％減）、６億２１００万円（１％減）、冷凍物は１万８９２８トン（９％増）、２４２億６８００万円（４５％増）、加工品は３５９３トン（１７％減）、２９億６５００万円（２０％減）だった。

冷バチ丸（ＧＧ）の輸入量は４８１２トン（２％減）で、数量が最も多い台湾産は２９５８トン（１８％増）となった。

（次ページ左欄上に続きます）

５～６月は例年よりも日本の独航船の入港隻数が多く、地中海沿岸国から養殖クロマグロ冷凍フィレー（Ｆ）の搬入も集中する。これらの荷を受け入れるスペースの確保もあり、超低温冷蔵庫の庫腹は依然として余裕のない状態が続く。円安の進行により海外船は、ドルベースの手取りが下がっている。冷凍メバチのインド洋台湾船の一船買い価格（外貨）は、昨年末に大バチ（４０キロ上）がキロ８００円へ上方修正されて以降、まだ変化はない。ただし関係者によると、原魚を安定して確保するため「未発表だが水面下では上乗せもある」という。台湾産冷バチのＣＩＦキロ単価の平均は、４月の７１９円から７５０円（２％安）へ上向いた。下げ相場にあった昨年同月を追い越す勢いだ。減船のあった台湾で残る船の出漁意欲をそぎ、稼働隻数をこれ以上減らさないよう、荷揚げを待つ運搬船の待機日数を減らすことも重要になる。

クロマグロ冷凍Ｆの搬入量は、４月に５０５６トンの大量搬入となった。昨年の５０００トン台到達は５月。今年および例年との１か月遅れは、安全上の問題から直前になってスエズ運河を回避し、南アフリカの喜望峰を迂（う）回するルートを選択した影響が大きかった。搬入量は昨年１１月からの今シーズンが計１万８２９９トンに積み上がり、前年同期比で３０％増となった。今シーズンの平均単価はキロ２５３４円で、前年同期の１３％高となっている。昨シーズンは競合国の需要低下で急落したが、現地のコスト高にも対応した価格帯へと見直されている。

ＮＺ産ミナミ始まる　生鮮物はニュージーランド（ＮＺ）船で、天然ミナミマグロの漁期入りが遅れた。４月下旬からようやく入荷がまとまったが１９トン（７７％減）にとどまっている。平均単価はキロ２０５２円で、２０４７円だった前年同月とほぼ変わらず。メキシコ産養殖クロマグロの数量は１４８トンで、引き続き高い水準を維持した。３３トンだった前年同期の４・５倍で、トランプ関税の影響と考えられる。

ただ、漁獲枠の増加を受け潤沢な国産生鮮クロマグロとも競合しており、単価はキロ２１１８円（２４％安）まで下がっている。

〈流通・小売〉　東京都区部小売価格４月　水産品目は値下げ優勢　（6月9日水産経済新聞）

東京都区部の２０２５年４月の小売価格動向によると、水産関連品目は３月に比べて値下がり優勢だった。前月と比較して値下がりした主な水産関連品目は、マグロ（中旬比０・２％安）、生サケ（３・３％安）、サバ（３・２％安）、ブリ（０・５％安）、イカ（１・９％安）、タコ（０・４％安）、タラコ（前月比２・５％安）、干アジ（１・６％安）、カマボコ（０・５％安）、寿司（弁当）３・０％安、焼き魚（３・６％安）となった。一方、前月と比較して値上がりした主な水産関連品目はエビ（中旬比２・２％高）、ホタテ（６・８％高）、塩サケ（２・３％高）、イクラ（前月比１・７％高）、寿司（外食）１・１％高、ウナギ蒲焼（１１・２％高）などとなった。青果や畜産も値下げ優勢だった。

〈流通・小売〉　チェーン協２５年４月 食料品２５月連続プラス　水産はハレ商材動く　（6月9日水産経済新聞）

加盟企業が総合スーパー（ＧＭＳ）主体の日本チェーンストア協会が発表した４月度の会員企業の総販売額は、１兆３３４億９７１万円（既存店前年同月比３・４％増）だった。衣料品（１・１％減）こそ前年割れだったが、食料品（６・４％増）の好調と住関品（３・３％増）の前年超えもあって２か月連続のプラスだった。主力の食料品は２５か月連続の増加ですべてのカテゴリーが前年実績を上回り、販売額は７２７４億１０１５万円だった。高騰するコメなどを含むその他食品（８・８％増）や簡便ニーズが追い風の惣菜（４・５％増）、豚・鶏肉の動きがよかった畜産品（４・５％増）などのプラスが目立った。

（右欄上に続きます）

（次ページ左欄上に続きます）

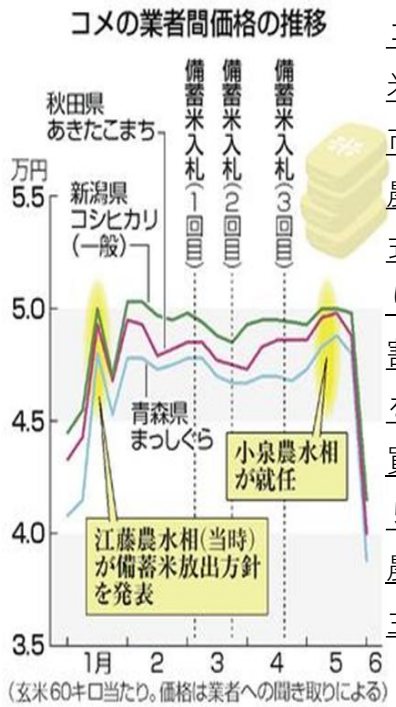
水産品については５７７億４８０２万円（１・３％増）と３か月ぶりのプラス圏だが、プラス幅としては同カテゴリーで最低となった。イワシ、サバ、アジといった青魚に加え、カキやホタテ、アサリなどの貝類のほか、タコ、ブリなどの売上高は前年を下回った。　一方、ハレ商材の刺身、マグロ、タイ、サーモンと日持ちする冷凍魚介類、塩ザケ、干物、ウナギ、漬魚などの動きはまずまずで全体を押し上げた。このほか惣菜は、寿司含めすべてが順調に推移。その他食品は、引き続きパスタや食パンといったコメの代替品の引き合いが強く、水産関連ではノリやチクワなどが好調だった。

〈流通・小売〉 販売統計２５年４月
水産は３カ月　連続前年割れ　（6月9日水産経済新聞）

食品スーパー（ＳＭ）が主体の流通３団体がこのほど発表した「スーパーマーケット販売統計調査」２０２５年４月実績によると、総売上高は既存店前年同月比１０３・７％の１兆６６８億４６０８万円となり、２６か月連続で前年同月を上回った。水産部門は８７７億２２５６万円（９９・１％）で、３か月連続減で食品では唯一の前年割れとなった。水産では相場高傾向に加え、引き続き鮮魚の入荷が不安定で販売に苦心したとの声が多かった。ブリやホタテは値上がりの影響で動きが悪かった一方、ワカメやモズクなどの海藻類、味付け・冷凍加工品など即食・簡便ニーズに対応した商品は好調。シラスやイカナゴは不漁で不調となった。ウナギや魚卵、塩干は引き続き不調だった。食品合計は９８３３億５６８１万円（１０４・１％）、生鮮３部門合計は３５７８億１７０万円（１０１・６％）。相場に落ち着きがみられ、一品単価は下落したが買い上げ点数が増加した青果は１４７２億３２５２万円（１０２・７％）、入学式などハレの日関連の販売が好調だった畜産は１２２８億４６６２万円（１０２・２％）。コメの価格高騰で米飯類が好調だった惣菜は１１５５億２７８７万円（１０３・９％）だった。

（右欄上に続きます）

コメ業者間相場２割急落
備蓄米の随意契約開始後　（6月9日みなと新聞）



コメ卸売業者の間で銘柄米を取引する「スポット市場」が急落している。農林水産省が随意契約方式による政府備蓄米の売り渡しを開始したことで、割高な銘柄米の人気低下を見込んだ業者が一斉に買いを停止。これにより、５月２１日の小泉進次郎農水相就任の直前に比べ、主要銘柄は２割近く値を下げた。昨秋から高騰していた業者間相場の沈静化が、小売価格の低下につながるかが注目されている。政府は３月以降、３回の競争入札で計３１万トンの備蓄米を放出。一方、スポット市場では、新潟県産コシヒカリ（一般）の６０キロ当たりの価格が１月下旬から４万円台後半を維持し、５月には約５万円に上昇した。これは前年同時期の約２倍の水準だ。そこで、小泉氏は競争入札を中止し、随意契約への切り替えを決定。スーパーなどに直接引き渡すことで、小売価格は５キロ当たり２０００円程度と、５０００円を超えることも珍しくない銘柄米に比べて大幅に安い水準となり、消費者が殺到して完売が相次いだ。安い備蓄米が行き渡れば、高いコメの購買意欲は鈍る。「これまではスポット市場で買い手だった有力卸ですら、２０２４年産米を手放すようになった」（流通業界幹部）といい、相場の雰囲気は一変。小泉農水相の登場から約２週間で新潟コシヒカリの業者間相場は４万１０００円前後まで下落した。「聖域なく、あらゆることを考えて、コメの価格安定を実現していく」とする小泉氏は、緊急輸入の可能性にまで言及。スポット相場にはさらなる下落圧力がかかる。

（次ページ左欄上に続きます）

ただ、これまでに高値で仕入れた卸業者には、直ちに値下げしにくい事情もある。農水省によると、５月１９～２５日の備蓄米も含めたコメの全国平均店頭価格は４２６０円。「当面は下落してもせいぜい数百円」（米穀商団体）との見方が依然として根強い。（時事）

天然クロマグロ本数２４％増 豊洲５月
国内生鮮大物　佐渡定置物まとまる（6月9日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場５月の生鮮大物売り場、国内物の入荷本数は３３１４本と前年同月比で１６・４％増加した。クロマグロの天然物と養殖物が増加したが、メバチとキハダは前年を下回った。クロマグロ全体の入荷本数は前年同月比２８・１％増の３１６７本で、うち天然物は２４・１％増の２９３１本。各地の定置網物がまとまり、主力の新潟・佐渡産は５９３本（前年同月１本）と不漁だった昨年から一変して、過去１０年でも２０１５年（９９７本）に次ぐ２番目の多さだった。この他、定置網物は七尾など能登半島主体の石川産が８７本（同なし）、萩や仙崎などの山口産が７６本（同１８本）、島根産が３０本（同１０本）、京都・舞鶴産が２７本（同１８本）と各日本海産は増えたが、北海道・噴火湾産は１４２本（同２４９本）と減った。

佐渡の定置物に次いで多かったのが、深浦や三厩など青森の釣物で５５２本（同１６７本）。延縄物を主体とする産地は、石垣島を含む沖縄産が２８８本（同２１１本）、塩釜主体の宮城産が２３０本（同１９６本）、銚子産は１０５本（同３２本）、大船渡などの岩手産が９５本（同５本）、千葉・房州勝浦産は３０本（同なし）と、いずれも入荷は好調だった。珍しい日本海産の延縄物も山形産が６０本（同１本）、秋田産が３７本（同１５本）あった。各地、各漁法物が増えた一方、釣、定置を主体とする壱岐などの長崎産は８０本（同２１８本）、延縄主体の那智勝浦などの和歌山産は７４本（同１３２本）と、ともに数を減らした。

（右欄上に続きます）

急増した定置や釣物と対照的に巻網物は主力産地が減少。塩釜産が１８８本（同７９５本）、鳥取・境港産が１６４本（同２３２本）と大きく前年を下回った。定置物など競合品の増加で卸が集荷を抑えた他、境港産は「大手スーパーとの直接取引などが活発化している」（卸会社）ため。巻網物はこの他少量だが福島産９本（同なし）、京都産４本（同）銚子産２本（同）あった。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、巻網物以外の大型（１００キロ以上）がキロ４０８０円で前年同月比１８・１％安、中型（１００キロ未満４０キロ以上）が３４２０円で同５・７％安、小型（４０キロ未満）は１８７９円と１９・５％安だった。巻網は、大型が同２３１９円と同１１・１％安。月間最高値は７日に入荷した房州勝浦産の延縄物（１６０キロ）で、１万２００円だった。潤沢な入荷が続いた下旬は下げ場面が目立ち、定置物の小型などは１２００円前後にまで下げるケースもあった。養殖クロマグロのセリ場売りは２３６本（前年同月１１０本）と２倍に増加。産地別の内訳は主力の長崎産１５９本（同５０本）、高知産４７本（同２６本）、愛媛産１２本（同５本）、奄美産７本（同９本）、三重産３本（同１８本）、鹿児島産３本（同なし）など。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は７０キロ上サイズがキロ３５００～３３００円、５０キロ上が３２００～３０００円、４０キロ下は３０００～２８００円前後。相対売りも引き続き旺盛で、休み明けの月、木曜日などは１日５０本以上が取引されたが、天然物の増加を受け前月比では減少したもよう。メバチ全体の入荷本数は６８本（前年同月８３本）と前年同月比１８・１％減少。主力の那智勝浦産は３７本（同３１本）と微増したが、小笠原産は１２本（同４５本）に減少。昨年は少なかった宮城・塩釜産は１７本（同１本）に回復した。発表されたセリ値の平均はキロ１５６５円と２４・１％安だった。キハダ全体の本数は７９本（前年同月２９１本）と前年同月比７２・９％減少。八丈島、三宅島などの伊豆諸島産が６４本（同２４６本）と減少したことが主な要因。前年に２６本あった沖縄産は１２本にとどまった。発表されたセリ値の全体の平均は、キロ１２０５円と２０・９％高だった。（時事）

（完）